

---

**あなただけを 聖ペテロ学園探偵部 < 1 >**

橘緑葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あなただけを 聖ペテロ学園探偵部<1>

### 【Nコード】

N2090W

### 【作者名】

橘緑葉

### 【あらすじ】

聖ペテロ学園には、金さえ払えば何でも調べる“探偵部”がある。

完璧人間な美人部長

情報屋な秀才副部長

潜入のスペシャリストな私……

セレブ・秀才・運動部・凡人という派閥が四つ巴の争いを繰り広げる学園で、日々舞い込む依頼を華麗に解決！

……するかもしれない。

時々下ネタが発生します。

嫌いな方はお気を付けください。

モバゲー（E エブリスタ）およびf c 2で掲載していたものを  
転載しています。

ものは試しでこー読んで下さいm ( ) ( ) m

## プロローグ

聖ペテロ学園は、小高い丘の上に建つ小中高大一貫の私立学校だ。

小等部はセレブしか入れない。

中高大は普通の子も入れるので、小等部からの生粋のペテロっ子との間には明らかな格差ができる。

例えば、通学手段。小等部組は車で送迎、受験組はバスか徒歩。

その他、くつ、カバン、昼食、教師の態度等々。

さらには、高等部からスポーツ特別・進学特別・普通とクラス分けされ、そこにも明らかな区別がある。

つまり、簡単にいうと、セレブ、スポーツ、秀才、凡人、という四つの派閥があるのだ。

他にも芸術家とかオタクとかヤンキーとか、色々いるが、ペテロっ子としてはこの四派閥を押さえておけば十分だ。

で、我らが探偵部。

部員は六名。

部長が一名。

副部長が一名。

会計が一名。

書記が一名。

ヒラが二名。

そして、うち三名が幽霊部員だ。

部長は高等部二年、セレブ組の勘解由小路真由美。かでのこうじ

まゆみ、と読む。奇跡の八文字姓名である。普段友人には「マユ」と、担任等には「カデノ」と呼ばれている。

副部長は高等部二年、進学特別組の馬締太郎。まじめだろう、と読む。両親ももうちよっと考えればいいのに。大抵の人に「ガリ勉」または「ガリ」と呼ばれている。

この二人と私以外は幽霊なので、そのうち紹介したいと思う。

私？

私は…高等部二年、今は普通組。吉備野麻紀きびのまき。あだ名は「ダンゴ」または「ダンコ」。

役職は、もちろん書記である。

## 依頼

いつも通りバスを降りるといかにもな高級車から、マユが降りてきた。

最近のセレブのはやりはエコカーなのに、あくまで燃費の悪そうなこてこてのアメ車。

たぶん、名前を書くだけで一分を要する名前をつけられ、効率って概念を身につけられなかったんだと思う。

「団子！ダンちゃん！ダン！」

このあだ名、嫌いなんだよね。

「ダンってば」

「ハイ、マユ！今日の髪型いかしてるね！キャメロン・ディアスみたいだよ」

「何それ」

「洋画の吹き替えのまね」

「また変なこと言って」

「ダンって名前、ビバリーヒルズの浮気男っぽいじゃん」

“浮気”という単語を聞いて、マユの目が輝いた。

「浮気調査の依頼が入ったよ！」

ここだけの話だが。

浮気調査の依頼はかなり多い。

金にも時間にも余裕があるセレブ組は恋愛のことしか頭にないみたいだ。ま、おかげで我が部は毎年赤字知らずだけだ。

マユもセレブ組じゃないかって？

分かってないな。マユは突然変異。

靴よりカバンより男より、三度のメシよりゴシップが好き。授業中にワンセグでワイドショーを見る。

それがマユだ。

「依頼人はA組の原田」

「ああ……」

「何よ、その“ああ”ってのは」

「いいえ。あの完璧男子か、って思っただけ」

マユはちらりと私を横目で見ると、興味なさげに、ふつんと言った。

「調査対象は……B組の森山」

「あらあらお似合いだこと」

「いちいち突っかかるね」

「別に。セレブ組には歪んだ憧れがあるからね私」

「ま、いいわ。早速放課後から調査開始！ 機材揃えといてね」

「はい」

浮気調査の時は、現場のビデオや写真を撮る。証言を集める時のためボイスレコーダーも使う。

そういった機材は、セレブマユの小遣いや調査費用で購入している。はつきりいって、下手な探偵事務所より設備は充実していると思う。

本当は生徒の間で商売なんてしてはいけないんだろうけど。

探偵部だって、正式名称は「超常現象研究部」だけど（笑）。なぜか代々黙認されてきている。

ま、学内派閥の狭間で、うまいこと綱渡りして生き残ってきた、忍者みたいなものかな、と私は思っている。

調査対象の森山優子は、三年B組、テニス部所属、ベンチャー系IT企業の社長令嬢。

父親は創業者で大株主。上場時に自社株で一攫千金した、いわゆるIT成金だ。



彼氏の原因はこのあたり一帯の大地主一族。至る所に親戚や縁者やらがいて、敵に回したら……  
厄介なことこの上ない。

その原田が、今。

探偵部のぼろい椅子に腰かけている。

「はい、では」

マユがメモ帳を手に、机を挟んで向かいの椅子に腰かけた。

私は窓際にあるPCデスクの椅子に座って、聞き耳を立てていた。

「ヒアリングを始めます」

原田は一言でいえば、嫌な金持ち。天が何物をも与えたのに、性格の良さだけは与えられなかったらしい。

「どうして彼女が浮気してると思ったんですか？」

「最近やたらと用事が多い。携帯も通じない」

原田が語る端から、マユがメモを取っていく。

「理由を聞いても……予備校だとか友達と会ってたとか嘘くさいことしか言わない」

「森山さん、外部受験するの？」

思わず私が口をはさむと、マユがしかめっ面で睨んでくる。

「本当かどうか分かんないけど」

セレブ組は推薦でもなければ、ほとんど内部進学する。お金さえあれば努力しなくても、そこそこの学歴が手に入るのだ。

「他には？」

マユが話を元に戻す。

「携帯に男からの着信があった」

「名前はわかる？」

「たくや……キムタクと同じ字。こいつから電話があった時、あいつ、携帯隠したんだ」

これは確かに、不安になるかも。

「了解。電話が通じなかった時間帯と“拓哉”から電話があった時間はない？」

「夕方だな。土日は昼も通じない。男から電話があったのは……」

そう言って、原田は携帯を取り出した。

「ああ、あいつの妹と三人でメシ食ってた時だから、先週の月曜だ」

## 調査方針

洗いざらい知っていることを話つくし、マユ作成の超俺様契約書と誓約書に記名押印して原田が出て行った、その三十分ほど後。

「ガリ、三年の個人情報出して」

遅れて部室に現れたガリ勉に、マユがそっけなく命じた。  
ガリは細い銀の縁の眼鏡をキラリと光らせて振り向いた。

「今度は何」

「浮気調査。対象は森山優子」

「ああ、あの癒し系の」

それから一拍置いて、にやりと笑った。

「いいね」

ガリは究極の出歯亀だ。そして情報マニア。  
彼のPCには、全学年全生徒、および前教職員のデータが、ぎっしり詰まっているという噂。

実際は PCではなくて、彼の頭の中に全部入っている。

「そうなの？ ほら、人間パソコン、早く！」

マユは男子に対して、基本、そっけない。  
黙っていれば彼女は……すっごく可愛い。

だから、マユと一緒に駅前を歩いていたりすると、しょっちゅう声をかけられる。

学園外の人間に。

聖ペテロ学園の生徒は、間違っても彼女に声をかけたりしない。なぜならうつかりマユと付き合うことになり、何かやらかして彼女を怒らせ、別れるようなことになれば、もう学園にはいられなくなる。

それを知っているからだ。

なぜかは　多分、日誌を読んでいけばあなたにも分かるはず。

ともあれ、マユという人間は、金持ち、美人、成績優秀、スポーツ万能という、一見（ここ重要）、少女漫画のキャラクターのような完璧人間だ。

「マユさん、できた」

さらに三十分後。

ガリがパソコン机から立ち上がり、プリントアウトしたA4の紙をマユのところへ持ってきた。

「森山優子……三年B組出席番号二十二番。デジタルネットワーク社の社長、森山誠司の長女。実母は離婚後、東京で働いている……妹が一人、中等部二年B組、森山亜衣……父親の再婚相手の連れ子か」

マユがブツブツ呟いている間、私はというと、必要機材の充電をしていた。

それから、盗撮用ピンホールの空いた特殊なバックを準備する。

専門店で売っているものはオヤジ臭いので、うちで使っているのはマユが改造させた、アニエス・ベーとかコーチとかのバッグだ。

マグライト、折りたたみ傘、小さな単眼鏡。

後は、変装道具だ。

予備校に行っている、と言いついてはいるなら、高校生の格好がいだらう。同じ路線にある公立のが、一番自然かな。

メガネをかけよう。ウィッグは……ちょっとマツシュなショートかな。

うんうん、楽しくなってきたぞ。

「あれ、バス通学かあ。ふうん、変わってる。趣味は料理、テニス。

……。

好みのタイプ……？ スリーサイズ……？」

ガリの資料を読みあげるマユの声がだんだんと疑問形になってくる。

「ガリ」

それから、非常に素敵な笑顔で。

「キモい」

と、言い放った。

「ありがとう」

ガリは嬉しそうである……。餌をもらった子犬のようだ。

私、ときどき思うんだけど。  
こういつマニアって、Mっ気がある人が多いんじゃないだろうか  
……。

今回の調査方針はこうだ。

まず、私が森山を尾行。一週間の行動パターンを把握する。この  
時点で人手が足りなそうだったら、幽霊部に召集をかける。

同時にガリは、森山周辺の噂を徹底調査。一週間経って、浮気の  
疑いが濃厚だったら。

いよいよ本格的に証拠集め。

私は現場を記録。ガリ勉は証言を収集。

浮気の疑いがなかったら？ 浮気していない証拠を集める方針に  
転換だ。

で、すべての結果をマユが取りまとめる。司令塔だ。

マユが一番楽しそう？ 甘いなあ。私だったら、そんな重大な役目、  
絶対やりたくないね。

## 尾行

準備した機材をマユの用意した車に乗せて、いよいよ調査開始。私は車内で変装開始。もちろん、窓ガラスはスモークが入っている。

同乗してるマユは、礼儀正しく視線を逸らしてくれているから、私は心おきなく着替えることができた。

途中のバス停近くで私は下車。トランクに積んでた自転車で追跡開始。

私。

浮気調査してていつも思うんだけど。依頼人は一体何がしたいんだろうね。

浮気が許せないのは分かる。でも、お金を支払ってまで、決定的証拠を掴みたいもの？

私の経験上、証拠を突きつけられた依頼人は、別れ話でこじれる確率が高い。

調査された方も、ムツとするし。調査した方も、怒りが倍増しているし。浮気相手に対しても、復讐してしまうこともあるし。

よっぼどひどい目に遭って、目に物見せてやりたいって思ってるなら別だけど。

軽い気持ちなら……浮気調査なんてしない方がいい。

最初の三日間、森山はまったく怪しい行動を見せなかった。

火曜と木曜は予備校。水曜は原田とデート。

暗くなると、いつも父親が迎えに来る。箱入り娘だなあ。でもま、今日もHRで注意があったけど、最近女子高生を狙った痴漢事件が頻発しているらしいので、分からなくもない。

そして、四日目の金曜日。

森山はいつも通り横浜駅でバスを降り。

予備校に向かうでも、帰宅の電車に乗るでもなく、横浜駅西口のバスロータリーから南の相鉄方面へと進んでいった。

私は慌てて自転車を乗り捨て、人込みの中、彼女を追って行った。

横浜駅を通り抜け、帷子川にかかる橋を渡り、ビブレの横を過ぎて　彼女は、某スーパーの中へと消えて行った。

その頃には私も探偵道具を起動させていて、手の平に隠れるICレコーダーに、彼女の行動を一々吹き込んでいった。

彼女はスーパーの中を、くねくねと歩きまわる。

食料品売り場、食べ物屋、二階の衣料品、雑貨売り場。

それから、また下に降りて、入ったのとは違う出口から出ていった。

そっちは予備校のある、ハマボール方面で。

私はてっきり、また予備校かと思ったのだけど。

彼女はそちらへは向かわず……手前に建つビジネスホテルの通用口へと。

吸い込まれていったのだった。



それから、ただただじっと待つ。さすがに暗証ロックのかかったホテルの従業員通用口には入れない。

ホテルの中へ入って行ったのが、夕方四時。出てきたのは 夜の十一時だった。

それから、駅まで父親が迎えに来て真っ直ぐ帰宅。

翌日の土曜、日曜は、朝六時前に家を出て、七時頃にホテルに入っていく。

土曜日は四時頃まで出て来なかったもので、日曜日は思い切って、ホテルの中へ入ってみることにした。

もちろん、正面玄関からね。

この日の私の変装は、シフォン生地、ふんわりした春らしいスカート。色は明るいスカイブルー。

黒っぽいインナーを着て、上に生成り色のジャケットを羽織っていた。

短大卒のOL風？ 仕込みカバンはコーチのトートバッグ。セミロングのウィッグを、ちよっと巻いて。でかサングラスで顔を隠す。

ホテルにカフェがあるのは調査済みだ。回転ドアを入ると、すぐにドアマンが会釈してくる。

さりげない風を装って、カフェへと向かう。

と、その時。

ロビーに客の怒りの声が、響き渡った。

客だからって従業員に、偉そうに接する人って大嫌い。どんな面してるのか、見てやるうじやないかと振り返った。

怒っているのは、中年の高血圧っぽい男性。傍らの枯れ木のような女性は妻だろうか。

ほら……つれあいをいたたまれない気分らせて。最悪な男。

どうやらベルガールが荷物を取りに来るのが遅かったらしい。ケ  
ピ帽を被った若いベルガールが、必死に謝っている。

どうでもいいけど。

制服の働く女子って……いいよね。

どうでもいいけど。

と、大騒ぎしている一団から、視線を逸らしたその時。

私の目に、予想だにできなかった光景が……

飛び込んできちゃったんだな。

## 潜入

一週間の調査を終えて。私たちは部室に集合していた。

「じゃあ、ダンちゃんから」

「はい、吉備野が報告します」

軽くあだ名に抗議して、私は報告書を二人に配った。

「この一週間、森山さんと浮気相手と思われる男性との接触は確認できず。ただ……」

何？ と顔をあげたマユに、私は何枚かの写真を渡す。

「依頼人の浮気現場を押さえました」

写真にはあのホテルの前を他校の生徒と手をつないで、仲良く歩く原田の姿、別の日に撮った、みなとみらいでキスするところ、彼女の家に消える二人の横顔が、はつきりと写っていた。

「最近の高校生は乱れてるよね」

「で？」

マユの鋭い視線が飛んでくる。

「森山は確かに、不審な行動をとってる。でも、浮気じゃないと思う。」

原田は何か理由があつて、森山に浮気の濡れ衣着せて別れたいんだよ。

私、そんな陰険な作戦の仲間になりたくない」

……………。

マユの沈黙は、声より雄弁に語る。

これはダメかな？ と諦めかけた時。

「とりあえず、依頼を片付けよう」

と、マユが口を開いた。

「森山は、バスを使うようになり、頻繁にビジネスホテルに通つてる。」

「こつは考えられない？」

マユは私が撮つた森山の写真を順番に並べた。

「貧乏なヒモができた。親に知られたくないから、家の車は使えない」

バスに乗る森山の写真を指差す。

「原田に二股かけたら、このあたりじゃやっていけない。地元を出よう……………」

予備校に入る森山を指し示す。

「男はたぶん、このホテルの関係者。従業員通用口の暗証番号を森

山に教えて、ホテルの中で逢っている……」

最後に、ホテルに消える森山の写真をつまみあげ、私に突き付けた。

「密会場所がビジネスホテルってのが、渋いのよね。」  
相手は既婚者のサラリーマンかも」

いつもながら、マユの……妄想力はすごい。

「ともかく。森山の調査は続行！ ダンコ、ホテル内に潜入して」

「はあい」

私が気のない返事をする、マユはニヤリと笑った。

「原田の方は……私に任せて」

ガリの調査は難航しているようだ。まあ無理もない。

ガリは見た目だけなら、いいとこのボンボンのうらなり顔に見えなくもないが

セレブ界からすれば、テストのヤマを聞くとき以外進特組の男など、鼻毛抜きより役に立たない。

……らしい（これ私じゃなくてマユの言葉です）。

ともあれ。鼻毛以下のガリがセレブ組の女子を調べるのは。

他の誰を調べるより難しい。

一週間調査して彼が報告できたのは、森山に浮気の噂はないこと。成績は外部進学するのに十分なこと。

それから。彼女は原田のことが、好きで好きで仕方ないらしいこと。

それから。

「一つだけ気になることがあるんだよな」

「妹への聞き取り結果。原田から調査依頼が入る一週間ちよつと前。森山が帰り道で転んだとか言つて、傷だらけで帰ってきたらしい。父親は決算の前後で大忙しだったはずなのに、大騒ぎして病院に連れて行つて……」

「それ、浮気疑惑と関係あるの？」

私が単純な疑問をぶつけると、ガリも首をひねった。

「うーん。この時、誰かと出会ったとか、何かきっかけがあったのかと思つてさ。」

「……すみません。他にめぼしい情報がありませんでした」

まあ、ガリがセレブの女子中学生からここまで聞き出せただけでも大手柄だけど。

ガリ自身も結果に不満なようで、

「非合法になるけど……別の方向から攻めてみるよ」

と意欲を見せ。

マユは、

「勘解由小路家はサポートを惜しまないよ」

と、犯罪行為を積極的に助長していた……

「ほんとにあんたみたいな若い子がこんな仕事続けられんの？」

一度の息継ぎもせず、新しい「仕事」の先輩に問い詰められて、私は一瞬フリーズした。

「まあ不況だからねえ。ぜいたくいつてらんないわよねえ。あんたの親もリストラされたクチ？」

この前もリーマンだかオーエルだかで会社つぶれたっていつてる子がいたわよ。」

リーマンか。リーマンショックのことか。

おばさまパワーにだけは、到底太刀打ちできる気がしない。

私はあいまいに笑って、制服の袖に腕を通した。

清潔感あふれるペッパーミントグリーン。襟の縁のモスグリーンがアクセントだ。プロらしく青いゴム手袋を装着する。

制服とおそろいの三角巾を頭に巻いたら……女子高生清掃員の誕生である。

仕上げにダサイベッコウ縁の眼鏡をかけ、胸ポケットにICレコーダーを忍ばせる。

折しも学校はゴールデンウィークで休み。ホテルは繁忙期。

何というタイミングだろう。

私は、まっさらなネームプレート、No.110のロッカーを閉め

て。  
戦場へと足を踏み出した。

……大げさか。

相棒のおしゃべりに辟易しつつ、従業員が逢引きできる場所はないか探る。

ホテルは365日24時間営業だ。従業員の勤務時間はシフト制。まさか仕事中にあれこれできるとは思えないから、森山の相手は休みの日に忍び込んでいるのかもしれない。

それが金の夜と土日の日中だ。

……無理がある、気がする。高校生同士のバイト先ならわかるけど。

職場に女子高生連れ込んで「デート」なんかするか？ しかも金土日立て続けに休みをとるなんて。

金曜の夜、土日。

まるで……高校生のバイト時間、ではないか。

とはいえ。部長の命令は絶対だ。

“浮気してない証明をする”

どんな疑問があっても、まずはこれをクリアしなければ。



地下一階には、従業員用ロッカーと、休憩室、リネン室、よく分らない倉庫が二部屋あった。

どの部屋も一本の通路沿いにあり、通路の両端には、一階へ続く階段とエレベーターがある。

そして、非常階段への扉が普通の階段の脇にある。

もし恋人と会うなら、人気のない倉庫が非常階段だろう。

残念ながら、私が採用されたのは夜勤だったので、森山の休日の出没时间にはホテルにいない。

が、暗証番号が分かればこっちのもの。ここからが私の得意分野だ。

ロッカーの鍵くらいなら、私でも空けられる。

夜勤終了後、漫喫で時間をつぶし、早朝五時半。

ロッカールームで仲良くなった、私と同じ夜勤のみのベルガールのロッカーを探す。

アルバイト社員のロッカーは無記名だ。

No. 224。

ふふふひ。

期待……じゃなかった、緊張に胸を踊らせ（ん？）私はロッカーに手を伸ばした。

このホテルのベルガールは白地に紺のラインが入った、ストイックな感じの制服だ。

詰め襟の襟元や袖口、ボタンラインが紺で、紺のラインを金で縁取ってある。

極め付けはケピ帽！

ケピ帽っていうのは、ドアマンとかベルボーイがかぶってる、低い円筒状の帽子。

ここのは紺のつばがついて、さらに中央に金糸でエンブレムが縫いとってある。

ぞくぞくするでしょ？

冬服は紺に金のラインらしい。たまんないね！

……。

と、盛り上がりながら、倉庫で着替えると、少し派手目な化粧をして。折畳み椅子を置き。ベンチコートを羽織り。水筒とお菓子と弁当を広げ。小型ノートパソコンを起動し。

椅子に腰をおろした。

ん？

何してるかって？

従業員通用口横の火災通報ベルに仕掛けた盗撮カメラの映像を受信してるのだ。

制服は……万一つかった時の、保険です！

## 真実

そうこうするうちに、朝七時。

彼女が現れた。

私はベンチコートを脱ぎ、小型のデジカメを手にそっと通用口の方をうかがった。

森山は

倉庫の前を通り過ぎ、リネン室も通り過ぎて、一番奥のロッカールームへ消えていった。

私はなにか、彼女の行動の意味を悟りつつロッカールームの前に立った。

ロッカールームは男女二部屋あり、男子が階段寄り、女子が奥のエレベーター近くにある。

私がドアに手をかけようとした時。

エレベーターが昇降する音がした。

見咎められてはたまらない。私はとっさに男子ロッカールームの中へ逃げ込んだ。

部屋の片隅に、山のように積まれた段ボールの蔭で息を潜める。

足音が近付き、消えた。

女子の方へ入ったのだろうか。

段ボールの蔭から出て、今度はロッカーの蔭に隠れる。

もう大丈夫だろうか。そろそろロッカーの林の中をドアへ向かって歩いていく。

ふと。

一つのロッカーに目が止まった。

“石川 拓哉”

……キムタクと同じ。“拓哉”だ。

「バイト〜?」

私が潜入一日目の結果を電話で報告すると、マユは非常につまらなそうに面倒くさそうに声をあげた。

「そ。ベルガール。……可愛かった」

「感想は聞いてない」

「あつそ。タイムカード調べたら、浮気疑われてた時間とピッタリ一致」

あのホテルは、個人情報の管理にもっと気を使ったほうがいい。

「ただ……」

「何?」

「“拓哉”って覚えてる?」

「もちろん」

「あのホテルに一人いたよ…石川拓哉。ガリ勉あたりから何か出てない?」

何気なく私が聞くと、マユは小さく唸った。

「明日、部室に集合！」

これは、何かあったな？

「了解！」

面白く、なってきた。

「……………うっわ！ やめて！ 私をアウトローな世界に連れ込まないで！！！」

自分も盗撮写真を抱えて部室に入った私は、ガリの報告書を見るなり叫んだ。

「大げさだなあ。ちょっと他人の戸籍謄本があったくらいで」

ガリが眼鏡をキラリと光らせて笑う。

「どうやって手に入れ……………いや、いい。知りたくない」

「役所の本人確認なんていい加減なもんだよ」

マンションのセキュリティだってねー、と色々な犯罪をちらつかせつつ、ガリ勉は非常に……………

満足気だった。

最後にマユが女性週刊誌を手に部室に現れ第二回目の会議が始まった。

「じゃ、ダンコから」

「はい、吉備野が報告します」

……。

私は森山のバイトのことを報告し、石川拓哉の存在を報告した。

マユから、バイト先で二人が逢っている可能性はないかと追及があるかと思っただが、

「あ、そ。じゃ、ガリ」

とそっけなくあしらわれ、マユは顎をしゃくってガリ勉に命じた。

「まあ、見てのとおりなんだけど……まず、デジタルネットワークはこの春にファンドに買収されてる。

株価が大暴落した後買い叩かれてね」

ガリが示したのは、デジタルネットワークのIR資料だった。

「社長は不採算部門と一緒に切り離されて……要するに、森山はもう金持ちじゃない」

「それで、バイトかあ」

「うん。学費はもう支払ってあったみたいだから、高校は卒業できるけど大学は無理だろうね」

ああ……

「うちはバカみたいに学費高いから」

森山。

「うん。浮気してる余裕はないね。ああ、それから原田だけど」

ガリが眼鏡を掛けなおした。

「こいつ最低だね。俺高校からの中途組だから全然知らなかったけど……」

いじめの常習犯で、酒、タバコ、……クスリ全部で嚴重注意受けてる。」

「退学ものでしょ？ この学校腐ってる」

思わず吐き捨てるように呟いてしまう。

「父親が強力なスポンサーだからできないんだよ。で、不思議と女関係の噂がないなあと思って調べてみた」

「今まで、学園内で付き合った生徒は一人だけ。  
去年の冬あたりに三ヶ月くらいかな」



そう言ってガリは写真を一枚、机の上に置いた。

「森山に似てるね」

私が呟く。

写真の中の生徒は、柔らかそうな頬をして、子犬のような目をした優しい女の子だった。

「で。」

「こっちが学園外で……手をつけた女性たち」

珍しく、ガリの声に怒りがあつた。

彼は、今度は写真ではなく一枚の名簿を指し示した。

左端に番号が振ってあり、次に名前、年齢、そして、入社日と退社日が、記入されている。

「どづいつこと？」

「親父の会社の社員とか、叔父の事務所のスタッフ。」

さっきの彼女と付き合い始めてから、ぴたりと手を出さなくなってる。

「……親父にばれたのかな」

原田の父は、不動産業を営んでおり、叔父は市会議員を勤めている。

改めて名簿を見る。

左端の番号は、実に二十三にまで達していた。年齢は全員二十代

初め。入社日と退社日は、ほとんどが一年以内。

「つまり……自分の立場をいいことに、逆らえない女の人たちを次々、その……」

つまみ食い、というのも使い捨て、というのも何だか女の人たちに失礼な気がして、私が言い淀むとマユが口を開いた。

「乱暴じゃないと、できないみたいよ」

「私が話聞いてきた。

ほとんどがもう忘れたといって言った。

初めは普通なんだって。

普通の恋人みたいに、レストランで食事をしたり、高いプレゼント買ったたり」

普通の恋人かどうかは知らないが、それはまるで、子供を手懐ける変質者に似ている。

「で、高級ホテルに泊まったり。

何もしないって口説き落として、部屋に入った後から豹変するんだって。

……レイプされているようないや、レイプだったんだと思う」

怖かっただろうな、と思った。

男の人が、大声を出すだけでも結構怖いのに。

「それからは、奴の気が向いた時に原田の家に呼び出されて。

決まり文句は“俺に逆らって、タダで済むと思うなよ”」

原田の親や叔父のところまで働く人は東京の企業に就職しなかったことから分かるように、地元志向が強い。

その彼女らに、原田のセリフはかなり効果的だったことだろう。

「で、学園内唯一の彼女なんだけど」

ガリが後を続ける。

「彼女が購読してる雑誌を装って、“イマドキ女子高生のエッチな真実！アンケート調査”をしたんだよね。

いや、セレブは違うね！ シックステーション年間購読！ 支払いは引き落とし！

やつら、明細見たら何が好きか一目瞭然だね」

どうやって人ん家の銀行口座の引き落とし明細を見るんだ。

「で、まあ、色んな質問に答えてもらったんだけど」

そう言って、ガリは記入済みのアンケート用紙を取り出した。

「ここ見て。“一番最悪だった思い出は？”」

人は匿名だとも何も言えるものと見えて、今まで付き合った人数だの、好きなタイプだの、エッチの経験数だの、よくもガリがこんなことを思いついたと思うようなくっだらな質問の中程に可愛い筆跡で、それは書いてあった。

あまりに露骨な内容なので、ここには書かない。

「よくこんなアンケートに答えてくれたよね」

私が素直な疑問を口にすると、ガリは待つてましたとばかりに笑顔で答えてくれた。

「彼女、某アイドルの熱狂的ファンらしいんだよ。」

“アンケートに答えてくれた子の中から、抽選で五名様に直筆サインをプレゼント！” って書いたらまんまとね」

こいつらアホか。

ともかく、これが別れた原因らしい。

と、いうことは……？

「じゃあ、原田が浮気調査を依頼してきたのって。

……また同じ理由で別れたら噂になるから？」

思いついたことをそのまま口にすると、マユが答えた。

「それだけじゃないと思う。それとね、“拓哉”を忘れてない？」

そうだ！ これで原田は浮気を確認したんだ。

「そこで、この戸籍謄本の登場です」

ガリがにこにこしながら言う。

「見て、信子さんのとこ」。斜線で消されてるから、これが離婚したお母さん。

【父】欄に石川博ってあるでしょ」

石川……

「お母さんの旧姓が石川なんだよ。  
で、ここ。“拓哉”ってあるでしょ。除籍って書いてあるからお  
母さんに引き取られたんだ」

彼は森山優子の兄ってことか。

Q・E・D・

これで、森山の浮気疑惑は完全なる濡れ衣だと証明できる。

## 報告

探偵部部室はクラブハウス棟の二階奥にある。  
非常階段もすぐ脇にあるので、人目につかずやってくることも可能だ。

さて。

今日は原田への調査結果報告の日。

何だかんだ言って、結局一番よく分かったのは、原田の鬼畜っぷりだったわけだけど。

お金をもらっているからには、最後までやり遂げなければならぬ。

午後四時を回って、原田がノックもせず部室へと入ってきた。  
おしゃれに着崩した制服。高そうな革靴。カバンを持っていないのは、勉強をする気がないからだろうか。

一つだけ空いていた固い椅子に腰かけ、いつかと同じようにマユと向かい合う。

「でっ。」

今となつては、色白な肌も、つやつやした唇も。

すべてがキモい。

この変態性欲男め。

マユは、眉一つ動かさず（ダジャレではない）、A4三十枚ほどの報告書を机の上に置いた。

「これが報告書。」

結論から言うと、浮気の実実はありませんでした」

「マジで？ 拓哉は？」

「お兄さんです。携帯が繋がらなかった時間は予備校とアルバイトです」

「そうなの？ ほんとに？」

「ほんです。証拠写真も資料も、全部この報告書に載ってますか」

二人の間に、沈黙が落ちる。

しばらく原田は報告書をぺらぺらとめくっていたが。

「困るんだよ」

とイラついた声音で言った。

私も思わず身じろぎしたほどの、豹変ぶりだった。

「何が困るんですか？」

マユがしれつとした顔で尋ねる。

「別れたいんだよね。でもさ、俺も名士の息子っての？ 変な噂立てられたら困るから。なんとかいじってくんない？」

それまで散々人でなしなことをしてきて。

今更名士の息子の体面とはどの口が言うのか。

「大丈夫ですよ。今までだって……全部隠し通してきたじゃない」

実に楽しそうな声で、マユが言った。

「何のことだよ！」

原田が机を力任せに叩いた。

「これのことだよ！」

マユが、負けじと机の上に二冊目の報告書をバシッと叩きつけた。

「強姦が親告罪でよかったね。今なら親の七光りで口封じできるもんね？」

親告罪とは、被害者の告訴がなければ捜査されない犯罪のことだ。そう、彼の犯罪は、今まで被害者の女性たちが口をつぐんできたからこそ、表沙汰にならなかったのだ。

「森山さんの浮気を証明したい？ 相手に傷があれば、自分の罪を覆い隠せるとも思った？」

「犯罪？ あいつら自分からホテルに入ったんだ。強姦じゃないね。ばっかじゃねえの？」

「ホテルに入ったら。服を破られ、殴られ、避妊もされず、セックスを強要されるって知っていたなら、合意の上だろうね」

被害者本人から聞き取りをしたマユの言葉には力があつた。



「それとも、名士の息子の原田君はSMクラブで女性を捕まえるのかな？」

「ばっかじゃねえの？ そんなところ行くわけねえじゃん！ あんまふざけたことばっか言ってるよ、ぶち殺すぞ！！」

椅子を倒して、原田が立ち上がった。  
今だ。

私はそれまで座っていたパソコン机から立ち上がり、マユの傍らに立った。

「なんだてめえ！」

「えっ！」

この前あったじゃん。

こいつほんと動物並みの頭脳しかない。

「ハイ。ご機嫌だねジョン……」

思わずダンが出てきてしまった。

「馬鹿」

マユの声で我にかえる。

「なめてんのか！？」

いいえ、馬鹿にはしてますけど。

「契約書、覚えてますか」

そう言って、私は依頼日にサインさせた契約書のコピーを原田につきつけた。

「依頼内容が公序良俗に反する場合および乙が不適切であると認められた場合については、乙の申し出により打ち切ることができる”

……乙ってというのが探偵部ね。というわけで、調査は打ち切りです。報告書はお渡しできません」

マユの隣に歩み寄り、机の上から一冊目の報告書を取り上げる。原田に奪い返される前に、PCデスクのひきだしにしまい、鍵をかける。

「……金返せよ」

「なお、この場合、すでに支払い済みの料金は返還しないものとする”契約書はサインする前にちゃんと読まなきゃ！」

ウフツ、と我ながらキモい笑顔でウィンクする。

「なめてんのか?!」

「なめてんのはそっちでしょう」

中学時代、演劇部で鍛えた腹筋に力を入れドスのきいた声を出す。

「あんた森山襲ったでしょう。」

ばれるのが怖くて、森山が浮気したことにして別れて森山に訴え

られても“二股女の逆恨みだ”って、ごまかそうとした。

相手を悪者にすれば、みんな同情して信じてくれるもんね！」

「どこに証拠があるんだよ」

「調べればいくらでも。森山は警察に届け出てるよ」

森山は病院でレイプ診察を受けている。精液その他のDNAサンプルはばっちりだろう。

「……犯人があんたとは思いもしないだろうけど」

森山。

怖かっただろうな。

それなのに犯人が、大好きな彼氏だったなんて。

あんまりに酷すぎる。こいつだけは許せない。

「強姦の犯人の半分は顔見知りや知人なんだって……あんた、有力容疑者だよ」

原田の顔が、目に見えてひきつつていく。

「お父さんに会社の人に手を出してるの、ばれたんでしょ。

だから、学校で健全な付き合いをするしかなくなってる。

前に付き合った彼女とは、できなかつたんだよね？ 乱暴じゃないと最後までイケないんでしょ。

だけど彼女もセレブだもん。下手なことしてばれたら大変なことになる」

私が言葉を連ねるに従って、原田の顔がだんだんと紅潮し、汗で濡れ始め、息は乱れ体は震え、明らかに、異常をきたし始めていた。

「何で。何で森山ならよかったの？」

さりげなく、私はマユの後ろへ移動する。

「黙れ！」

「最低だよな、あんた。彼女のお父さんにお金がなくなったから？何をやっても文句いう力もなくなったと思った？」

原田が机を蹴り倒した。私めがけて飛びかかってくる。

私は鼠のようにすばやくシェーのポーズで奴をやり過ごし。前のめりになった原田を、マユが迎え撃つ。

まずはボディ。みぞおちに入った。

「ぐふう！」

よろけた原田の股間を蹴り上げる。

「きゃあ！」

もんどりうって倒れた原田の肛門付近に蹴りを入れる。

うつぶせになって股間を手でかばい、ケツを天に向かって差し出した奴の姿は……思わず激写したくなるくらい滑稽だった。

それから……約一時間後くらいかな。  
額に黒々とマツキーで

「××豚野郎」

と書かれた原田が部室を出て行ったのは。

ちなみに、「××」の部分には……えーと、男性器の形状を揶揄する表現が含まれているため、ここでは敢えて記さない。

入ってきた時とは打って変わって、シャツをズボンにしまい、きつちりネクタイを締めた豚野郎の背中に仕事後の一杯（三ツ矢サイダー）を引っ掛けながら、私はねぎらいの言葉をかけた。

「森山と探偵部に手を出さない方がいいって……わかってるよね？」

原田が振り返った。

「うちのパソコンさあ、ウィルスソフト入ってないんだよね。  
ネット上に流出したら……メ・ン・ゴ」

人も殺せそうな恐ろしい視線を原田は私に送ってきたが。

「ああああ大変。」

そんなことになったら、原田君はインポじゃなくてハードゲイだ  
って噂が……立っちゃっわね」

私の肩越しにマユが言った。三ツ矢サイダー噴いちゃったよ。

「……露骨だよ」

この小説十八禁になるんじゃない。

「ん？ 短小の方がよかった？」

マユ……人がわざわざぼかしたところを全部言いやがった。勘解由小路の名が泣くよ。

でもまあ。

「マユ。」

それはもうおでこで堂々と公表してるから。原田先輩！ 素敵よ

「！」

そう言って。

私は得意のキモいウィンクをし、原田に向かって親指をピンと立てて見せたのだった。

よいこはぜったいにまねしてはいけません。

森山は。

三月頃に父が会社を追われると知ってから、バイトを始めた。

原田には言えない。

少しでも彼に嫌われそうなことは、言えなかった。

初めはコンビニのバイト。でも。原田にはばれていた。

あの日。

森山の妹が証言した、あの日。

彼女は深夜の帰り道で襲われた。

男は目と口だけが見えるスキーマスクをかぶり彼女をナイフで脅して人気のない公園の暗がりに入れ込み。殴り、噛みつき、服を破き、言葉で侮辱し、そして犯した。

なぜ知っているかって？ 最近この街では似たような事件が頻発してる。学校の先生は「女子高生を狙った痴漢事件」とぼかして注目を促していたけど、現実の事件は痴漢よりも凄惨なものだった。強姦魔は何度も犯罪を繰り返す。

森山で味をしめた原田は、スキーマスクで顔を隠しナイフをポケットに忍ばせて、勝手知ったるこの街の方々に潜む暗がりへ女性を連れ込み彼女たちの体と心を引き裂き続けたのだ。

森山が父の車で病院へ行き、診察と事情聴取を受けて家に帰り着いて、すぐ。

彼女の実母から電話があったそうだ。

普段は義母に遠慮して、滅多に連絡してこないのに、電話を取り次いだ妹を見た。森山が泣いているのを。

そして、彼女が決然と、兄の連絡先を教えてほしいと言うのを聞いた。

私にレイプ被害者の心情は完全には分からない。

それでも、傷ついた体と心で学校やバイトに行くのはつらかったろうということは分かる。

だけど、金が必要だ。森山は、兄に仕事を紹介してもらった。彼はホテルのドアマンだ。

実兄が同じフロアにいる。それだけで安心だったのかもしれない。

父親は心配して毎日ホテルや予備校に迎えに行く。  
実母は義母の視線をもともせず、ちよくちよく遊びに来るよう  
になった。

森山は。時々夢にも見るだろうし、パニックの発作には事実何度  
も襲われていた。病院には、カウンセリングにあれからずっと通っ  
てる。

それでも、それでも森山は。

原田が卑怯な工作をしているその時にも  
家族と一緒に必死で戦おうとしてたんだ。



## エピソード

それから。

それからどうしたか知りたい？

仕方ないなあ。日誌は依頼者に報告した時点でお終いなんだけど。原田はまだ逮捕されてない。事情聴取はされたようだけど、DN Aサンプルの提出を断固として拒否しているようだ。

どこかの誰かがリークして。叔父の市議員は甥っ子の不始末について議会で追求されている。

特に問題視されたのはクスリ。どこかの誰かが学校の極秘文書を盗み出して。奴の懲罰履歴を暴露したらしい。

週刊誌でも報道された。こちらも小学校時代からの原田の懲罰履歴の一覧の写しが、ばっちり掲載されていた。さらに父親の会社での悪事も、女性たちが重い口を開き始めたから原田家の評判はがた落ちた。

当の原田はというと。……最近見かけないなあ。内部進学予定だったから、ろくに勉強もしてないだろうし、進路、どうするんだらうね。

森山は。

相変わらず聖ペテロ学園に通っている。最近は仕事がなくなっただけなのか、お父さんが車で迎えに来ている姿もよく見かける。

中古の軽自動車。妹と三人、仲好く帰っていく。

この学園には、セレブ、スポーツ、秀才、凡人という四つの派閥があつて。

それぞれの間には大きな溝が存在している。

だけど、このご時世、一体いつ貧乏になるか分からないし、いつけがをするか、いつスランプに陥るか分からない。

だから、私は思うんだよね。

ほんとに大事なのは肩書きじゃない。

その人自身の強さとか、優しさとか、賢さとか、思いやりとか。

そういうものがあれば、たとえ金持ちじゃなくなっても、顔をあげて生きていられるし、そういうものがなければ、金持ちだって軽蔑される。

もしもあなたが無謀にも、当学園に入ろうと思うなら……

私は断然、探偵部派に入ることをお勧めする。

探偵部には、セレブ部長と秀才副部長、凡人書記がいて後の二人は幽霊部員。

だけど、みんな自分の特技を生かし尊敬……はしてないけど尊重し合つて過ごしてる。

探偵部派は無所属派。所属するのは簡単。ただ入部届を出して、あなたらしく過ごすだけ。

私たちはいつでも六人目の幽霊部員を歓迎します

おしまい

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2090w/>

---

あなただけを 聖ペテロ学園探偵部 < 1 >

2011年10月9日15時01分発行